

中国語音声教育における軽声問題の初歩的研究

——中国語中級学習者を対象として——

丁 雷

概要：

軽声は中国語の声調の中の一つの特殊な声調現象であり、それは一体、一つの独立した声調に属するのか、または一種の変調現象であるのか、それとも一種の音高処理の策略であるのか、現在学界では依然として一致していない。現在のところ、「軽声」(軽声)と「弱勢現象」(軽音現象, 軽読現象)を区別して対処することについてはすでに共通認識となっている。しかし、このような結論は中国語を学習する外国人学生にとっては、いかなる指導をしてもほとんど意味がない。外国人学生が知りたいことは、軽声の型は何か、高さはどのくらいか、どのようにすれば習得できるかである。残念ながらこの3つの問題についてはずっと良い解決策がなく、軽声の教授は曖昧ではっきりしない状態に置かれており、教材自体、軽声のピンインを統一していない現象がある。また、軽声の教授について、関連章節が簡略化されており、削除すらされている。教員は軽声に対して基本的に「展開しない、分析しない、比較しない」といった概括的な教授法を採っている。外国人学生の軽声の誤りについて、「軽声の誤った発音は何ですか」という疑問に、現在もなお答えることができていない。これらの問題を解決するために、軽声について一連の深く掘り下げた研究をする必要がある。本研究はこの一連の研究のきっかけとして、まず軽声に関する研究成果を振り返り、次に、軽声教授の現状について総括を行い、最後に軽声の誤りと評価基準の問題について意見を述べる。

キーワード：中国語発音、声調習得、軽声

1. 軽声研究のまとめ

1.1 歴史背景

中国語音韻学(唐作藩、2014)では、言語内の異なる音節は音素上の区別のほか、高低の違いや強弱の違いがあると認識している。したがって、英語、ロシア語、フランス語、日本語のようなアクセント構造の言語を分析する際、アクセントの位置に研究の焦点を当てる。一方、声調を含むシナ・チベット語系言語を分析する際には、音の高さの連続変化の類型に研究の焦点を当てる傾向がある。中国語の「弱勢現象」はアクセント研究の範囲に属するため、音の高さに関心を持つ中国語音韻学には「弱勢現象」の概念がない。また、中国語音韻学の研究対象は主に書面語(例：『切韻』、『広韻』)である。一方、「弱勢現象」は一つの発音概念であり、書面語は直接には音が聞こえないため、弱勢の研究難度は非常に高い。

それでは、「弱勢現象」はいつから中国語音声学の研究領域に入ってきたのか。厉为民

(1981)は**赵元任氏**が1992年の『**国語罗马字研究**』において初めて「**轻声**」の概念に触れたと指摘している。しかし、実際には**赵氏**の文章中で、「**轻声**」に対してどのような概念を主張したのか見出すことはできない。ただ、**赵氏**は「**轻声**」について言及したとしか言えない。そのため、**厉为民** (1981) の見解には一定の誤解があったと思う。**梁磊** (2007) の研究は、中国語の各方言において普遍的に存在する「**弱勢現象**」をみると、その出現と発展の歴史は比較的長いということを指摘した。例えば、**陈国** (1960) は、かつて使用されていた**ブラーフミー文字** (Brahmī, インドの古文) を転写した唐代中国語の文献によると、8、9世紀の間の中国語西北方言にはすでに「**弱勢現象**」が存在していたと推測している。**Mei** (1977) は、朝鮮学者の文献によると、現代中国語の北方方言の「**弱勢現象**」は16世紀まで遡ることができるかと推定している。**王力** (1980) は、「**弱勢現象**」の文法的な機能は文法の発展にしたがって生じたものであると指摘した。例えば、中国語標準語における「**弱勢現象**」は動詞語尾の「**了**」「**着**」が形成された時代に生じ、介詞の「**之**」を限定語尾「**的**」とした時代に、新たに語気助詞の「**吗**」「**呢**」などの字が生まれたとみなすべきであると認識している。**王力**は20世紀以前に「**弱勢現象**」がすでに生じたとの見通しを立てている。**李思敬** (2000) は『**紅樓夢**』についての研究によって、18世紀の北京方言の中にすでに「**弱勢現象**」が存在していたと推定している。**张树铮** (2003) は**蒲松齡**の著作の研究を通して、17世紀の山東省の中部地域の方言の中にすでに「**弱勢現象**」が存在していたと推定している。以上列挙した多くの先行研究の成果では、「**弱勢現象**」が方言音声学の研究領域から次第に中国語音声学の研究分野に入ってきたことを証明した。

数十年の研究を経て、「**弱勢現象**」は中国語音声学において一つの重要な構成要素となり、専門家らによって繰り返し研究や討論が行われ、様々な定義が出された。例えば、中国国内の大学で開講されている基礎中国語において、「**弱勢現象**」の定義については「**四声**は一定の条件下で、元の形、強さ、長さが変化して、一種の声調変体になる」(『**現代汉语** 上下』**黄伯荣、廖旭东**, 1997) とされている。言語学専攻の基礎課程においては、弱勢の定義を「標準語には音節ごとにその声調があるが、語あるいは、文中の一部の音節はしばしば元の声調が失われ、一つの比較的に短い声調となる」(『**現代汉语**』**胡裕树**, 2011) としている。一般民衆向けの『**現代汉语词典**』(第六版) では、「**弱勢現象**」を「話す際に一部の文字の発音はしばしば短く読まれ、これを**轻声**と言う」(商务印书馆编, 2012) と定義づけている。

ところが、「**弱勢現象**」の定義づけがなされると同時に、人々は「**弱勢現象**」と「**轻声**」との違いを次第に意識した。例えば、**魏钢强** (2005) は、「高さの**轻声**」(调值轻声) は連続した際、短く読む声調を指す。「形の**轻声**」(调类轻声) は元の声調の形を失う声調を指すことを指摘した。**魏钢强**は「形の**轻声**」を(第一声、第二声、第三声、第四声に対して)「**轻声**」、「高さの**轻声**」を(アクセントに対して)「**弱勢現象**」と言い、**轻声**と「**弱勢現象**」は異なることを主張した。これに対して**林焱等** (2013) は、「**弱勢現象**」はアクセントと相対する音声現象であり、**轻声**は「**弱勢現象**」の下部概念であると指摘した。声調が失われる音節は「**軽声音節**」となる。これより、学界では「**轻声**」と「**弱勢現象**」についての理解の違いによって、声調派、変調派、弱勢派の3つに分かれた。声調派の代表的な人物は**张**

洵如、路继伦、王嘉龄などで、「弱勢現象」は「中和声調」であり、「第五声」とも称される。変調派の代表的な人物は黄伯荣、廖旭东、鲁允中、曹文などで、「弱勢現象」は一種の特殊な変調であって第五声ではないとの認識である。さらに、王洪君（1994）は軽声の高さは前に続く文字の声調によって決まることを指摘した。弱勢派の代表的な人物は赵元任、黎锦熙、徐世荣、曹建芬などで、中国語にはアクセントがあり、軽声は一種のアクセント音節と相対する「弱勢音節」であると主張している。

1.2 軽声

軽声と音声の四要素は密接に関連しあっている。簡単に言うと、音響学の分野からみて、軽声は音高の幅の圧縮と持続時間の短縮、その次に音強の弱まりである。音色の影響について、声母は無気音の破裂音と破擦音が有声音化したものとみなし、韻母は「主要母音」を「中央母音」になることである。具体的にみると、音長の分野においては曹文（2010）が、時間の長短が軽声の最も顕著な特徴の一つであるとした。曹氏は、中国語の中では、軽声音節の判断は主に音の長短に依存するとした。例えば、「试试」（下線部は軽声）と「逝世」、「东西」と「东西」、「左右」と「左右」のような語における音声上の重要な違いは、前者の2文字目は後者の2文字目より短いということである。音の高さの分野においては、軽声の高さはその前の音節の高さの影響を受けるため固定値はなく、学者は常に「五度値」を用いて軽声の高さを表す。曹文（2010）は第二声の後の軽声の高さを [3]、第一声の後を [2]、第三声の後を [1] とすることを指摘した。しかし、外国人に対しての中国語教育においては、曹文は、前の音節を第三声で読む時には、軽声音節の高さは比較的高くなり、前の音節を第三声以外で読む時には比較的に低くてよいと説明するだけで十分であると教員に指摘した。音の強さの面では、鲁允中（1995）が軽声は音の弱さであると指摘した。しかし、軽声音節の強さは時に、軽声でない音節よりも強くしなければならないことさえあるため、近年大多数の学者は、音の強さは軽声の本質的な特徴ではないという見解で一致している。

文法面では、軽声は語の品詞を変える役割を持つ。例えば「地道」の「道」は、もし元の声調で読めば名詞となり、軽声で読めば形容詞となる。次に、軽声は語の構造を変えることもできる。例えば、「干事→干/事」、「爱人→爱/人」である。また、そのほか、語彙の面においては、軽声は意味を変えることもできる。書面語には「老子→老子」、「地方→地方」のように元の声調と軽声は同じ漢字が使われている形はたくさんある。それに対して、「报仇」と「报酬」のように、元の声調と軽声は異なる漢字が使われる場合もある。

軽声が生じる原因について、鲁允中（2011）は軽声が生じる外部的要因と内部的要因を以下のようにまとめた。外部的要因からみると、軽声は一種の音声現象とみなし、音声変化の結果である。内部的要因については、主に3点ある。第一に、軽声は同音の語句を区別するために生み出された一つの表現手段である。第二に、軽声は発音の際の生理上の特徴である。一般的に、発音器官の緊張と疲労を軽減するために、双方が聞いて理解できる部分はやや力を抜く。そのため、語句をつなぐ一部の助詞などの虚詞は次第に軽声へと変化した。第三に、音声リズムの条件であり、軽声が音声のリズム感を一層強めることがで

きる。

軽声の読み方については、現在多くの辞書や教科書で軽声語句の収録と処理に対して相違がある。相違が生じる主な原因の一つは軽声の読み方がずっと統一されていないことである。学者の観点は主に2つに分かれており、そのうち、周祖谟氏、高景成氏、徐世榮氏は、軽声で読まなければならない語句と軽声で読んでもよい語句（以下、「必読軽声語句」、「可読軽声語句」とする）は一律に元の声調をつけて表記する「厳格な基準」を主張した。一方、張洵如氏は一律に元の声調をつけて表記する必要がないという「寛容な基準」を主張した。黎錦熙氏は『国語辞典』を編纂した際、語句のうち軽声の文字と軽声としてもよい文字について、「可軽声」と称し、(・)で記した。『現代汉语词典』（第六版）もこの方法を参考にし、軽声で読まなければならない語句と軽声で読んでもよい語句をそれぞれ区別して注を加え、学習者にとってより指導の意義があるものとした。中国語教育の視点から軽声の読み方について論じた毛世楨（2008）は、中国語の中には軽く読んでもよい語彙と軽く読まなくてもよい語彙が多く存在しており、「必ず軽声」で読まなければならないかどうかという問題にこだわる必要はないことを指摘した。

1.3 軽声語

「弱勢現象」と「軽声」について論じる際、多くの研究は「軽声語」について言及している。軽声語には軽声の語句が含まれ、一種の語彙現象である。現代中国語において、「弱勢現象」は、一般的に特定の文字、あるいは語句の付加部分として現れたものであり、特定の語句ではない。こうした現象が生じる原因は、一般的に韻律、韻脚と関係がある。軽声語は、「必読軽声語句」と「可読軽声語句」の2種類に分けられる。そのうち、「必読軽声語句」は規則の有無によってさらに2種類に分けられる。規則のある軽声語には以下の文字が含まれる。構造助詞（例：的、得、地）、アスペクト助詞（例：了、着、过）、語気助詞（例：吗、吧、呢）、比況助詞（例：像、如、似）、重ねて発音する親族の呼称（例：爸爸、妈妈、哥哥）、よく使われる意味のない語素（例：：～子、～气、～是）、「一」と「不」が重畳する動詞や形容詞の間に挟まった時（例：看一看、写一写、看不看、写不写、美不美、好不好）、単音節動詞の重畳（例：吃吃、喝喝、走走）、AABB式（例：说说笑笑、搂搂抱抱）とABAB式（例：学习学习、研究研究）の第二音節。近年の研究では、以下の一部の特定の語句の組み合わせの中にも規則のある軽声が存在することが見つけられた。例えば、多音節の軽声語（例：「做什么」、「不在乎」、「不好意思」）。また、軽声の連続した語句、すなわち前後が分割できない文字構成の語句（例：「垃圾」、「葡萄」、「玻璃」、「骆驼」）がある。ほかに、「类词缀」軽声語、すなわち一つの同じ語素を軽声音節として構成された軽声語もある。例えば、「长处」、「害处」、「好处」の「处」は具体的な場所を表すだけでなく、事物のある一面のみを表す。「可読軽声語句」の大多数は規則のない軽声語である。「必読」に対して「可読」の意味は、この種の軽声語は前後の文の長さ、焦点を当てるアクセントの位置、話者の感情など様々な要素の制約を受け、言語を使用する異なった環境の中ではそれぞれのアクセントの特徴が現れるということである。しかし、「可読軽声語句」には一部規則があ

るものもある。例えば、前、中、后、上、下、左、右、里、外、面、頭、辺のような単音節方位詞や、方向性を示す動詞（来、去、上、下、進、出、起、過、回）で構成される複合方向補語（例：起来、過去、回去、下来など）である。しかし、一部の辞書や教材の中では、この類の語句に対して違う意見もある。例えば、《現代汉语词典》（第六版）では、「外面」は轻声語句であるが、「里面、左面、右面、南面」は非轻声語句である。また、「北边」以外のその他の「边」を含む語句は全て轻声語句である。

2. 轻声教育の実態

2.1 轻声教育の意義

『現代汉语常用词表』を例にすると、この表に収録された語句は全部で56008語あり、そのうち轻声は2045語で、3.64%を占めている。具体的には、『現代汉语常用词表』において、単音節の轻声が約18語で、0.032%を占めている。例えば、啊、吧、呗、嘞、的、地、得、啦、嘞、哩、了、吗、嘛、呢、哇、呀、哟、着などである。主に語気助詞と構造助詞で、明確な文法の特徴があり、比較的に区別しやすい。多音節の轻声語句は全部で2027語あり、3.6%を占めている。そのうち、二音節が1286語、三音節が652語、四音節が85語、五音節が4語である。このような膨大な轻声語句に対して、毛世楨（2008）は、母語話者は全く自覚のない状況下において正確で熟練した轻声を身につけていることを指摘した。一方、

表1 轻声と元の声調の区別処理（引用：邵敬敏 2016, 補足）

語句	台湾のアナウンサー	大陸、台湾民間 (発音と解釈)	轻声 (発音と解釈)
姑娘	gū niáng	gū niáng 父あるいは夫の姉妹	gū niang 未婚の女性あるいは女の子
生意	shēng yì	shēng yì 生气	shēng yì 商業経営
兄弟	xiōng dì	xiōng dì 兄と弟	xiōng dì 弟、兄弟分
丈夫	zhàng fū	zhàng fū 成年男子	zhàng fu 夫
大方	dà fāng	dà fāng 専門家あるいは玄人	dà fang 気前がよい
花费	huā fèi	huā fèi 使用して消耗する	huā fei 消耗する金あるいはコスト
人家	rén jiā	rén jiā 住民	rén jia 他人あるいは自己を指す（女性用語）
实在	shí zài	shí zài 誠実、偽りが無い	shí zai 着実、地道、ちゃんとしている

外国人学生にとっては、長期的な言語実践を通してやっと思得することができる。以上のような軽声の「数が多い」、「習得が難しい」という特徴から見れば、軽声の教授を現在の中国語教育から削ることはできるのか。例えば、現在の中国語教材では、「七」と「八」の変調はすでに削除された。また、変調の規則もだんだんと簡単になり、第三声と「一」、「不」の変調のみを教えている。では、軽声も類似の対応で処理することができるのか。

現在、先行研究では、軽声の教授を軽視し、外国人学生は本場の中国語を話せないことを普遍的に認識している。それでは、軽声と本場の中国語は一体どのような関係があるのか。邵敬敏(2016)の研究は我々に啓示を与えた。この研究において、邵氏は中国大陸の民間と、台湾の民間および台湾のアナウンサーの「軽声」の処理における差異に焦点を当て、全面的な比較研究を行った。研究では、書面語の軽声については、大陸と台湾の民間および台湾のアナウンサーの発音は基本的に一致した。例えば、**孩子、房子、舌头、石头、呆呆地、渐渐地、爸爸、星星、谢谢、太太、娃娃、爷爷、宝宝**などである。話し言葉の軽声についても、大陸と台湾の民間および台湾のアナウンサーの発音は基本的に一致した。例えば、**东西、街坊、喇叭、意思、胳膊、蛤蟆、喇嘛、萝卜、暖租、钥匙、衣裳、耳朵、家伙、马虎、吓唬、名字**などである。これに対して、意味または品詞を区別する軽声については、大陸と台湾の民間では違いを区別するが、台湾のアナウンサーは違いを区別しない。具体的には表1を参照されたい。

邵敬敏(2016)では、また別の興味深い研究がある。意味または品詞を区別しない軽声について、大陸と台湾の民間では全て軽声で読み、台湾のアナウンサーは元の声調で読む。例えば、**东家、疙瘩、篱笆、蘑菇、委屈、打发、补丁、弟兄、畜生、大方、大夫、冒失、下巴**の後音節を大陸と台湾の民間は軽声で読むが、台湾のアナウンサーは第一声で読む。**苍蝇、舒服、折腾、芝麻、窟窿、核桃、苗条、明白、时辰、合同、狐狸、老婆、凑合、动弹、困难**の後音節は、大陸と台湾の民間は軽声で読むが、台湾のアナウンサーは第二声で読む。**挖苦、柴火、云彩、别扭**の後音節は大陸と台湾の民間は軽声で読むが、台湾のアナウンサーは第三声で読む。**烧卖、邋遢、累赘、盘算、黄历、皇上、妥当、稳当、扁担、动静、对付、告诉、教训、阔气、漂亮、认识、岁数、益处**の後音節は、大陸と台湾の民間は軽声で読むが、台湾のアナウンサーは第四声で読む。

邵氏の研究を通して、インターネット上あるいはテレビの中で耳にする台湾のアナウンサーの中国語と大陸のアナウンサーの中国語では、両者の中に、軽声の処理方式における明らかな差異が存在することが分かった。そのため、先行研究で軽声の重要性が強調され、軽声と本場の中国語との密接な関係があると指摘されてきたが、この点については非の打ち所がない事実であると認識している。しかし、「本場の中国語」と密接な関係があるという特徴だけでは、軽声を必ず教える理由にはならないと思う。非中国語圏の学習者から見ると、大陸と台湾地区の中国語は、特に差がなく、どちらも「本場の中国語」と思われている。また、教員の中には、軽声は必ず教えなければならないものであるが、なぜ必ず教えなければならないのかは分からないという方が少なくない。

そのほか、日本の中国語検定試験(筆記部分)においても、軽声に関するテーマが出題

される。そのため、多くの検定試験に関係する教材は「これが軽声教授の目的の所在である」との認識によって、しばしば単語表の中で軽声と4つの声調の組み合わせが一つの独立した訓練の一環とされている。しかし、検定試験に出題される軽声の問題を細かく分析すると、いくつかの特徴に気づいた。

例えば、

- (1) ①意思 ②客气 ③妹妹 ④桌子 (2016年3月88回4級)
- (2) ①先生 ②杯子 ③椅子 ④桌子 (2015年3月85回4級)
- (3) ①漂亮 ②时候 ③行李 ④头发 (2011年6月74回4級)

以上の3問では、4つの選択肢から声調の組み合わせが他の3つと異なる肢を選択することが求められている。このようなテーマの中では、形式上は軽声を考察しているが、実際には学生の語彙の発音に対する記憶を考察している。そのため、このようなテーマと軽声の教授は無関係である。

また、別の例を見ると

- (4) 石头 ①头发 ②力气 ③艺术 ④喜欢 (2016年3月88回3級)
- (5) 屋子 ①门口 ②窗户 ③教室 ④黑板 (2015年3月85回3級)
- (6) 便宜 ①健康 ②清楚 ③明白 ④方便 (2014年3月82回4級)
- (7) 舒服 ①凉快 ②营业 ③感冒 ④清楚 (2013年3月79回3級)
- (8) 长处 ①码头 ②绳子 ③茶馆 ④免费 (2012年6月77回3級)
- (9) 热闹 ①好处 ②校园 ③钥匙 ④咳嗽 (2012年3月76回3級)

以上の6問では、4つの選択肢から与えられた声調の組み合わせと一致するものを選択することが求められている。このようなテーマでは、形式上は軽声を考察しているが、実際にはやはり学生の語彙の発音に対する記憶を考察している。このようなテーマと軽声の教授も直接の関係はない。

では、どのようなテーマが軽声の教授と関係あるのか。以下の例を参照されたい。

- (10) 便宜 ①健康 ②清楚 ③明白 ④习惯 (筆者改)

この問題のテーマは、「便宜」の「宜」を軽声で読むと、答えは「明白」とすべきである。もし「宜」を軽声で読まなければ、答えは「习惯」とすべきである。では、「便宜」の「宜」は、一体、軽声で読むべきか、それとも元の声調で読むべきか。これらの問題の回答は軽声教授の意義と重要性和関係している。そのため、この問題の答えは「明白」と「习惯」どちらでも正解となる。

2.2 軽声教授の特徴

まず、大まかにみると、日本の中国語教授は中国語専攻の中国語教授と、初修中国語教授の2種類に大別される。しかし、この2種類の教授ではどちらも軽声の分野においてはいかなる要求もしない。島根大学を例にとると、中国語と関係のある課程には中国文学研究、中国言語文字研究、漢文字研究、漢語史研究および、中国語比較言語研究がある。これらの課程では、学生が文字の識別や読解能力を養うことに偏っており、発音にかかわる会話

表現能力の訓練はあまり重要視されておらず、軽声教授について話す必要がない。これに比べると、初修中国語の教授では実用性と実践力に訓練の重点が置かれ、学生の会話表現能力の育成が重要視されている。しかし、初修中国語授業においても「軽声」に対して具体的な要求はない。これに対して、この2種類の教授では語彙量¹、文法の程度、文章の書写能力については具体的な要求がある。

次に、軽声教授と中国語能力は無関係である。島根大学の初修中国語授業には入門、初級、初中級、中級、中上級、上級の6つのレベル別の区分がある。各レベル別の学習時間、語彙量、文法項目は表2の通りである。表中、「レベルの程度」は中国語検定試験の各レベルにおける具体的な要求を参考にして大まかに定めたものである。先に述べたように、中国語検定試験では、軽声習得のレベルは言語能力の高さの基準を測るものとされており、ピンインを暗記する内容として考えられている。そのため、それぞれのレベルごとに学生の軽声についての専門的な訓練は設置されておらず、評価基準もない。郭春貴(2003)では、中国語検定試験4級と3級の包括的な単語を整理した。郭氏は軽声の軽声語句を含む240語を整理したが、これらの軽声語句の大部分は教材や中国語検定試験では見られない。この結論に基づくと、語彙量を測る際、軽声語句の部分は省いている。換言すると、各レベルにおける軽声語句の数量には差がないということである。その上、中国語検定試験2級以下では会話試験が行われず、各級での審査には発音の質が考慮されていない。そのため、各レベルで代表的な異なる程度の中国語教授では、実際には学生と軽声習得のレベルとは無関係である。

表2 島根大学中国語授業レベル別区分

レベル	学習時間	語彙量	文法項目 ²	レベルの程度	教授時間および対象(4月入学の新入生を例とする)
入門	40時間	200	30	準4級から4級の間	時間:1年の4月から1年前期まで 対象:中国語授業で2単位取得した学生
初級	80時間	500	60	4級	時間:1年の4月から1年後期まで 対象:中国語授業で2単位取得した学生
初中	120時間	800	80	4級から3級の間	時間:2年の4月から2年の前期まで 対象:中国語副専攻の学生
中級	160時間	1200	100	3級	時間:2年の4月から2年の後期まで 対象:中国語副専攻の学生
中上	200時間	2000	120	3級から2級の間	時間:3年の4月から3年の後期まで 対象:中国語副専攻の学生
上級	200時間以上	3000以上	150以上	2級	時間:自学 対象:中国語副専攻の学生

¹ 語彙量は <http://shimadai-chinese.blogspot.com> の「学習語彙表」を参考にすることができる。

² 文法項目は『中国語検定対策3級4級 文法編』(郭春貴著 白帝社)と『中級者の悩み解決ピンポイント中国語文法』(丸尾誠著 NHK出版)を参考にした。

最後に、軽声教授と教育目標は無関係である。軽声教授の意義はまだ不明確であるため、教授目標を設置する際、軽声を考慮している人はほとんどいない。そのほか、軽声を全て軽声あるいは元の声調で読むことは、少なくとも現行の日本人に対する中国語教育にとっては差が明らかでないといえる。ここで一つの興味深い例として、島根大学で毎年行われている中国語技能コンテスト³を挙げる。朗読部門では、スピーカー同士の間差は発音上のみが体现されるよう、朗読の内容は必ず統一されたものでなければならない。審査員は学生の発音に対して、中でも声調の処理についての要求は比較的に厳しい。しかし、軽声には一定の声調の高さがなく、前の文字の影響を大きく受け、規則をうまくつかむことができないため、軽声について審査を行うことはできない。しかし、軽声を全て元の声調で処理すれば、学生の発音はかえって審査員に良い印象を残すことができる。このため、本来は軽声で読むべき場合であっても、効果を表現するために故意に軽声で読まないことがしばしば見られる。

2.3 軽声教授の難点

中国国内の外国人に対する中国語教育界は外国人学生の「軽声問題」を一般に2種類にまとめている。一つは軽声の発音方法がきちんと身につけていないこと、もう一つはどの語句を軽声で読むのかを知らないことである。中国国内の研究結論を参考に、実験音声学の観点から日本の大学生の中国語軽声語句の発音状況について追跡調査を行い（N=50、調査の対象は入門レベルから中級レベルの在籍生）、以下は調査を通して分かったいくつかの現象である。

一つ目の現象は、中国語の声調がきちんと身につけていないことである。日本人学生は、学習に英語の勉強方法を用いて中国語を学習する傾向がある。英語には語句の強弱の区別があり、これは意味と品詞を区別することができる。“re’ search” (V) と “ research” (N) のように、両者のスペルは全く同じであり、ただアクセント位置の違いによって意味と品詞を区別している。アクセントが後ろにあるのが動詞で、意味は「研究する」となり、アクセントが前にあるのが名詞で、意味は「研究成果」となる。英単語は長さの問題によって、その「強」と「弱」が聞いた感覚で音高上の「昇」と「降」の2つの形式が理解されやすく、しかも、この種の「昇降」は比較的に自由である。この点は、多くの黒人が歌う歌の中に特に目立つ。これに対して、中国語の声調は「平、昇、曲、降」の4つの定まった声調の型を持っており、声調の形ごとに決まった高さの変化範囲（五度制を参考にする）がある。母語が日本語である学生にとって、日本語の音調は比較的単純で、実際には「高」と「低」の2種類の形のみで分けられる。しかし、日本語の音調の型は文字が表す意味と品詞の機能で区別され変化しており、中国語の声調系統には遠く及ばない。このため、日本人学生が声調を学習する際、「昇降の不安定」と忘れやすいという2つの状況がしばしば見受けられる。これは入門および初級段階では最もよく見られる現象である。この2つの段階の学生についていうと、1つの単語の声、韻母を覚えることは声調を覚えることよりずいぶん

³ 毎年のコンテストの様子は <http://shimadai-chinese.blogspot.com> の Youtube を参考にできる。

容易である。この2段階においては、学生たちは4つの決まった型の声調でさえもきちんと身につけておらず、軽声のように決まっていない声調の型を習得することは言うまでもない。

二つ目の現象は、母語の「音声のマイナス移転」の問題である。ある研究では、英語では音高とアクセントが関係しており、中国語の高声調（第一声、第四声）は英語を話す学生が重く読む音であると誤解しやすい。一方、英語の弱勢音節は通常最も低いため、中国語の第三声は軽く読むと誤解されやすい（沈晓楠 1989）。また、英語の音調音域は比較的狭く、アメリカ人と中国人がそれぞれ母語を使って話す際、アメリカ人の音域は少なくとも中国人より1.5倍狭い。日本語の音調規則は日本人学生が中国語を学習する際にも「マイナス移転」を生じる。日本語の漢字には「訓読み」と「音読み」の2種類の発音があることを知っている。「訓読み」の音調変化は比較的大きく、「音読み」の変化は比較的小さいが、基本的に全て下降調である（長谷川良一 1990）。この漢字を音読する際の「下降」習慣は学生の脳内に深く根付いているため、日本人学生が中国語を学習する際、発音上の「降趨勢」の誤りがよく見られる（丁雷 2015）。

三つ目の現象は、声を出す喉部の発音器官が筋肉運動を制御している時に生じる時間の差が発音に影響することである。朱晓农氏は声調の発生と喉部の発音器官との間には一定の関係があると認識している（朱晓农 2013）。郭锦桴（1993）は朱晓农氏より早くから、喉部の発音器官が声調に及ぼす影響を認識している。郭氏は喉の筋肉活動が声調言語と非声調言語を発する際に生じる時間の差を指摘し、外国人学生が声調を発音する速さが遅く、後れていることが主な原因であることを導いた。この状況は日本人学生の中で実際に一種の「平趨勢」として多く見られる（丁雷 2015）。日本語の音声システムは音節の組み合わせを基本単位としたものである。音節ごとに一種の音調モデル「高」あるいは「低」が現れ、音声システムはいくつかの「高」「低」を組み合わせた連続発音である。例えば、アジサイ「低高高」、ボタン「高低低」、アサガオ「低高低」（例は今津藤一 1993より引用）。一方、中国語の音声システムは音節を基本単位としたものであり、一音節ごとの内部に、日本語の「高」「低」と似た変化以外に、「低」から「高」までの「昇」と「高」から「低」までの「降」の変化がある。しかし、声調を発する前の準備段階では、日本人学生の喉の発音器官は、筋肉が「昇」「降」変化を制御する際に、持続時間が不十分であるため、「上昇」または「下降」の幅が不十分となり、聞いた感覚では「平調」と似ている。発音時間が短すぎるため発音の錯覚が生じ、自分では意識的に「昇」を発音したが、実際に聞いた感覚では全く「昇」となっていないこともある。

四つ目の現象は、日本人学生は軽声を理解していないことである。彼らは完全に軽声を無視しており、軽声を全て元の声調で発音する。あるいは軽声を発音できない。特に、第二声と第三声の後の軽声は正しく読むことが最も難しい。教授の中で常に「軽声は声調がないのではなく、軽く短く読むのである」と曖昧な紹介をしている。しかし、「軽」「短」について一体どのように身につければよいのか、教授の中ではそれに関する内容は全くない。声調研究の結論によると、軽声の音高は非常に重要な要素であり、前音節の高さの影

響を受ける。こうしてみると、教員は軽声を第一声、第二声、第三声、第四声の後に見られる全ての状況において学生に説明して理解させる必要がある。このことに焦点を当て、曹文（2010）は教授における詳細な解説は、各声調の後の軽声の高さは必要ないが、前音節を第三声で読む時には後音節の軽声の高さは比較的に高くなり、前音節を第一声、第二声、第四声で読む時には、後音節の軽声の高さは比較的に低いことを説明すべきであると教員に指摘している。また、軽声について「教える、教えない」、「何を教えるのか」、「教えるのはよいことか」、この3つの問題はずっと教員を当惑させており、現在に至るまで統一した意見はない。教員が当惑しているのであれば、学生はいうまでもない。軽声がきちんと身につけていないため、教授法には実際には大きな問題がある。

また、「どの語句を軽声で読むべきか」という問題は、教授の中でこれまでずっと妥当な解決策がない。現在、標準語の軽声語句はいまだに統一された基準がない。辞書、指導要領および外国人学生に向けた中国語教材の中で音声表記が矛盾している部分が多くある。たとえ中国語の母語話者であっても、方言や習慣の影響のため、軽声で読むべきか否かしばしば辞書を引かなければならない。これは間違いなく日本人学生が軽声を学習することに大きな戸惑いをもたらしている。現在では『中国語常用軽声辞典』（小川郁夫、张科蕾 2014 白帝社）のような関連の辞書があるが、効果は極めて小さい。この問題をどのように解決するか。米青（1986）は軽声語句の教授範囲を縮小し、規則のある軽声語句のみを教えるべきであると指摘している。一方郑秀芝（1996）は、軽声語句の教授範囲を拡大すべきであると指摘している。なぜなら、軽声は北京語の音声の特徴を体現しているからである。陈小燕（2004）は、軽声語句をABCの3つのランクに分けることを主張した。Aランクは意味の区別がある軽声語句、Bランクは規則のある軽声語句であり、この2種類は外国人学生が必ず習得しなければならないものである。一方、Cランクは規則がなく異議があるとされる軽声語句であり、外国人学生が習得する必要はない。また、A、Bランクの軽声語句が習得できれば、中国語の連続発音の軽重変化は基本的に表すことができるとした。

3. 「軽声」に関する現実問題

3.1 軽声の誤りはどのようなものであるか

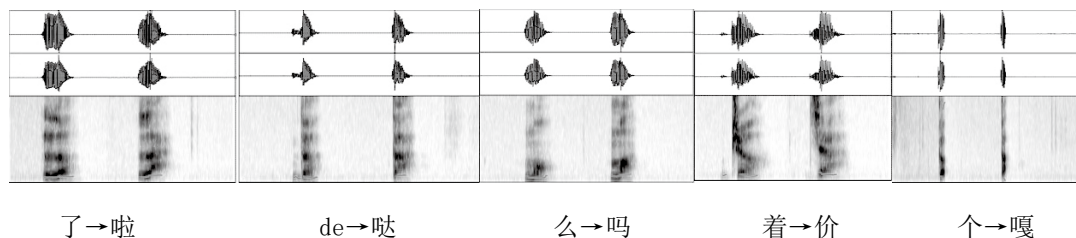
現在使用されている日本の中国語教科書では、軽声の声調の型が記載されていないだけでなく、軽声の声調の高さも述べられていない。こうしてみると、軽声の発音は教員とCDの模範発音に完全に頼っている。では、学生が軽声の発音を誤った時、教員はどうすべきか。実際、これは非常に興味深い問題である。声調の型も高さもわからない「軽声」をどうして発音の誤りといえるのか。あるいは、どのような発音が軽声の誤りと見なされるのか。この問題について、関連の音声実験研究を行なった。実験対象は「中国語音声セミナー」を受講した20名の学生で、彼らが実験に参加した際の中国語の学習時間は120時間から160時間程度であり、中国語の中級レベルに属する。実験は録音室で行い、SONY ICD-UX560Fを用いて収録し、Audition CS6 for Macを用いて抽出と雑音処理を行い、最後にPraat6.0 for Macを用いて波形の抽出を行なった。軽声の質を保証するために録音ファイル

は一律に 64000 圧縮比を採用した。実験の内容は一冊の中級閲読教材で、この教材を選んだ目的は学生が文章を朗読する際にどのように軽声を処理するのかを考察するためである。実験分析を通して、以下のような 2 つの現象を見出した。

第一に、被験者の軽声意識が非常に強いことである。無声調表記の箇所をみると、被験者は一般的に故意に音高または強さを調整しており、これは彼らの理解によって生じる軽声発音の「特徴」である。なぜ故意に調整するのか。それは、今読んでいる単語は「軽声」であるということを教員にはっきり理解してもらうためである。強さからみると、「左重右軽」は被験者の一種の基本的な処理方式（あるいは一種の策略といえる）である。この策略の下で、前音節と後音節との間の強さの比は、1+0 の前後の強さの比を 2 : 1、2+0 の前後の強さの比を 3 : 2、3+0 の前後の強さの比を 2 : 1、4+0 の前後の強さの比を 3 : 1 と表せる。そのうち、2+0 の強さの比が最小である。学生は発音する際、エネルギーは主に前の声調の上昇（聞いた感覚では長すぎると感じることもある）を維持することに集中しており、後ろの声調の軽声の強さは自然に弱く変化した結果であると認識でき、工夫を凝らしたのではないと感ぜられる。例えば、「时候」、「孩子」、「(带) 来的」、「(家) 庭的」、「(居) 民的」である。

この「左重右軽」の発音策略の形成原因について、主に被験者の「軽」に対する直感と教員の解説によると考えている。実験後の数人へのインタビューを通して、学生の「軽」に対する感覚は、「発音して筋肉が突然緩む」、「音の長さが突然短く変化する」、「音の高さが突然下降する」と総括できることを見出した。実験では、学生がこの 3 つの面から着手し、努力して自分の発音の制御と改善を行なっていくことがはっきりと感ぜられた。このことから見ると、学生が軽声を処理する面で「合格点」を与えることができると思う。しかし、韻母 e の発音は比較的難しく、また、韻母 e の軽声は比較的多い（「了」、「着」、「个」、「么」、「的」、「得」、「地」）。そのため、学生は韻母 e を発音する際には工夫を凝らしていき、意識して韻母 e の軽声を発音すると重くなる。図 1 は、実験中によく見られる軽声の誤りである。これらの軽声の誤りの共通点は全て韻母 e が含まれていることであり、被験者は韻母 e を処理する際、e の処理を a としやすすい。a は一つの「高母音」であるため、発音する際、e より必要なエネルギーが大きい。そのため、聞いた感覚では a はより強く、前音節の韻母の強さを超えることさえあり、「下降調」に近い感覚として聞こえる。

図 1 韻母 e の軽声および誤り



第二に、被験者の轻声の発音の誤りには、一定の調型モデルがある。本実験において、収集された轻声の発音の誤りについて整理と統計を行なった。轻声の誤りは主に「X+ 的」、「X+ 了」、「X+ 着」、「X+ 上」、「X+ 个」に集中しており、「他们」、「时候」、「喜欢」、「弟弟」のような轻声語句における誤りは比較的に少ないことが分かった。また、轻声の誤りには3つのタイプがあることが分かった。一つ目は轻声が第一声の「平調」に近い発音になること（略称「平類」）、二つ目は轻声が第三声の「低調」に近い発音になること（略称「低類」）、三つ目は轻声が第四声の「下降調」に近い発音になること（略称「降類」）である。収集された誤りの声調の型を図2にまとめた。図2より、被験者は轻声の文字を第二声のような「上

図2 3種類の轻声の誤りモデル

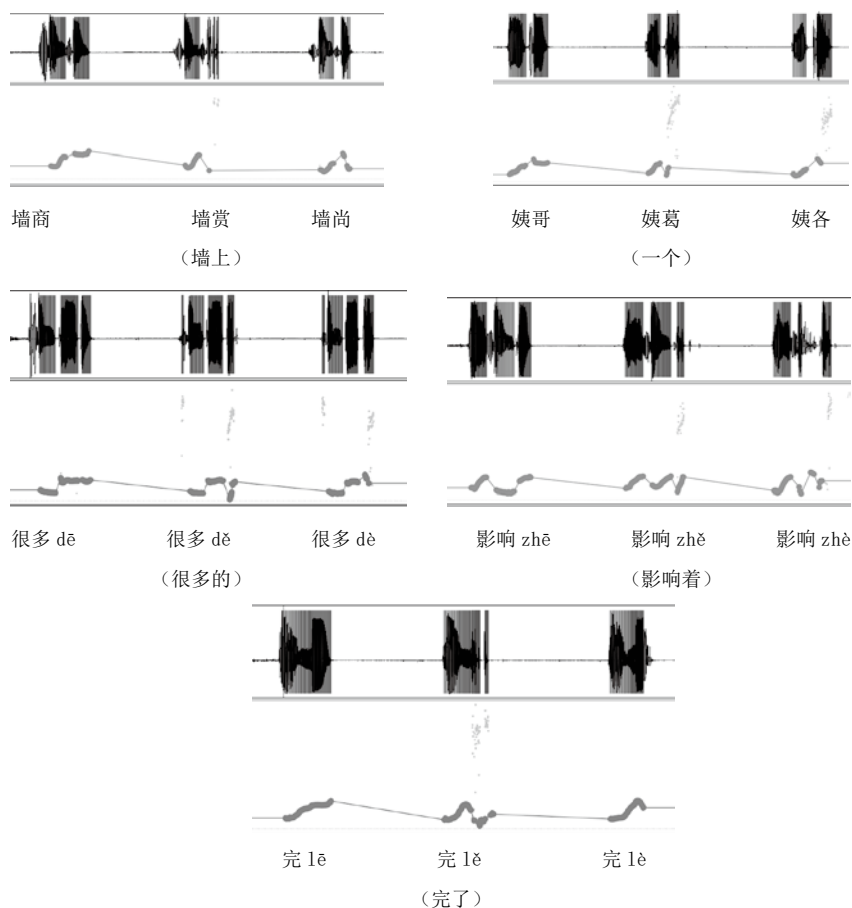
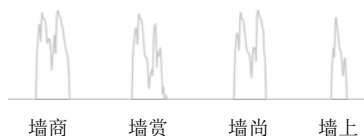


図3 「墙上」の4つのメカニズム図



昇調」の形で発音することはないことが見て分かるが、これは意外な発見であった。一体「上昇調」が難しいからであるのか、それとも軽声の声調の型の特徴と「上昇調」は相反しているために招かれる現象であるのか、現在はまだ知り得ていない。他にも、この3種類の調型モデルの中で、「降類」の誤りが最も多く、3種類の誤りの数の比率は「降類：平類：低類＝3：1：1」である。しかも、「降類」と軽声は声調の型の上では非常にはっきりとした境界線はない。軽声化の程度が比較的に高い（「的」「了」「着」のような）文字の発音は、「降類」と軽声は音の強さと長さの面から強制的に区別することができる。しかし、軽声化の程度がそれほど高くない（「上」「里」「来」のような）文字の発音は、音の強さと長さでは区別することが非常に難しい。

しかし、「降類」でも「平類」でも「低類」にしても、後ろの文字の声調の型によって、前、後の文字の声調の間のエネルギーは2つの明らかな波の山を形成し、図3のように、一度の発音のエネルギーは基本的に前の文字に占用され、後ろの文字の軽声で得られるエネルギーは非常に小さいため、ほとんど波の山はない。これらも声調の型が運動とエネルギー分配をする中で存在している一定の対応関係であり、この対応関係は、軽声固有のエネルギーモデル（左重右軽）に合わなければ、聞いた感覚では「軽声が軽くない」といった現象が生じる。

3.2 軽声をどのように評価するか

軽声の発音は、強さ、音高、声調の型の問題以外に、教授におけるもう一つの非常に厄介な問題が、どのように評価するかという問題である。これは音声実験において特に悩ましい問題である。「墙上」を「牆商」「牆賞」「牆尚」と発音することは発音の誤りであるのか。それとも「訛りがある」のか。それでは、軽声の発音は結局何が「発音の誤り」であるといえるのか。実を言うと、この問題は各人によって見方がそれぞれ異なっている。前節の中で様々な軽声の誤りを列挙してきたが、これらの誤りはただ研究のために強制的に「抽出」された発音の問題である。その中の一部の誤りは「誤り」であるとはみなせない可能性がある（例えば、「了」が「啦」の発音になる、「个」が「嘎」の発音になる）。実際の会話の中では、確かに前文で言及した「東西」「左右」「起来」などのように、時に表現の効果や効率に影響を及ぼすことがあるが、コミュニケーションに支障をきたすことはない。たとえ軽声の文字を元の声調あるいは全て「降類」として読んでも大きな問題が引き起こされることはなく、「おかしい」または「不自然」と言われるにすぎない。大体このようないくつかの原因は、軽声の研究がこれまでずっと学界の重視を促すことがなかったためである。軽声の教授に関しても、教材では一般的には簡単に触れられるのみで、展開しない。

軽声発音のレベルを評価することは、その根本的な目的は学生の軽声発音を改善することである。では、この目的を実現するために、具体的にどのような改善を行うべきか。以下でいくつかの提案を出したい。

第一に、教授現場において「軽声」の声調の型を統一することである。軽声は「短い」「降調」で完全に処理でき、軽声の文字が弱勢化した文字であるかにかかわらず、全てを「降調」

として発音できる。ただし、この「降調」は「短い」降調であり、「左重右軽」の発音策略では、それは発音するにはほとんどエネルギーを持っていない。しかし、曹文氏が言及したように、「他们」の「们」のように第三声ではない語の後の轻声文字は「高調」で発音しなければならない。この意見に対して、私が主張する「降類」化は、主にエネルギーの処理（「左重右軽」を強調する）に対して現れるが、曹文氏のこの意見は声調の型に焦点を当てたものである。この2つの意見の間に矛盾する点はなく、ただ異なる観点から言及しただけである。

第二に、教材の中で「轻声」に関する内容を合理的に計画立てることである。初級教材においては「常用轻声表」を提供し、轻声教授は中級教材の中で扱うべきである。実際、四声をまだ完全に習得していない基礎の上で、学生が轻声を理解することは非常に難しい。そのため、発音段階において轻声教授の内容を取り入れる必要はないと私は主張する。また、入門段階から初中級のこの段階では、轻声の出現率は非常に低い。教授の中で工夫を凝らして轻声の解説を行う必要はなく、学生の轻声の発音についていかなる要求をする必要もない。もしこの段階で轻声の発音について必ず要求をしなければならないのであれば、轻声の前音節の発音についてさえ要求すれば十分であると思う。正式な轻声の教授は中級段階以降、学習時間の増加に従って徐々に展開していくべきである。轻声教授はペアリング練習を基本モデルとする必要がある。例えば、「墙上」を例にとると、学生に「墙上→墙商」、「墙上→墙赏」と「墙上→墙尚」の比較を示し、自分の発音を調整しながら、最終的には改善に到達するのが目的である。

第三に、授業後の学生の自学の便宜を図るため、オンライン上の轻声データベースを作るべきである。具体的にいうと、学生が現在学習している教材を素材として、轻声のウェブサイトを作る。このサイトでは、学生は「常用轻声表」を調べることができただけでなく、全ての轻声の読み方を調べることができる。またこのサイトでは録音して、学生は自分の発音と轻声の読み方の対照を行うことができる。教員は学生の発音を分析し、改善への意見を出すこともできる。他にも、このサイトでは轻声のリスニング訓練を提供し、学生に授業後の余暇を利用してリスニング面の訓練をさせることもでき、効果的な発音の改善を助ける。

参考文献

1. 曹文 2010. 《现代汉语语音答问》: 87-96, 北京: 北京大学出版社
2. 陈国 1960. 汉语轻音的历史探讨, 《中国语文 1960 (3)》, 北京: 中国语文出版社
3. 陈小燕 2004. 论轻声词界定的必要性, 《语言文字应用 2004 (1)》, 北京: 语言文字应用研究所
4. 长谷川良一 1990. 日本学生学习汉语语音上的几个问题, 《第三届国际汉语教学讨论会论文选》: 219-224, 北京: 北京语言学院出版社
5. 丁雷 2015. 对日本大学生汉语发音中“声调难”问题的探索-以初修汉语的教学对象为例-,

『中国語教育』第13号：186-204，中国語教育学会

6. 端木三 2016. 《音步和重音》：33-44，北京：北京语言大学出版社
7. 郭春貴 2003. 『中国語検定対策3級4級・単語編』，白帝社
8. 郭锦桴 1993. 《汉语声调语调阐要与探索》：211-227，北京：北京语言学院出版社
9. 梁磊 2007. 汉语轻声的历史层次初探，《南开语言学刊》第2期：32-38，天津：南开大学
10. 林焘 2013. 《中国语音学史》：613-629，北京：语文出版社
11. 厉为民 1981. 试论轻声和重音，《中国语文 1981（1）》：35-40，北京：中国语文出版社
12. 李思敬 2000. 现代北京话的轻音和儿化音探源，《语文研究》第3期
13. 鲁允中 2011. 《轻声和儿化》，北京：北京大学出版社
14. Mei (梅祖麟) 1977. Tones and tone sandhi in 16th century Mandarin. 《Journal of Chinese Linguistics》5
15. 毛世桢 2008. 《对外汉语语音教学》：31-128，北京：商务印书馆
16. 米青 1986. 普通话轻声教学刍议，《语言教学与研究 1986（2）》，北京：北京语言大学出版社
17. 邵敬敏 2016. 两岸汉语轻声词异同比较研究，《语言文字应用 2016（1）》：131-137，北京：语言出版社
18. 唐作藩 2014. 《音韵学教程》：1-11，北京：北京大学出版社
19. 沈晓楠 1989. 关于美国人学习汉语声调，《世界汉语教学 1989（3）》，北京：商务印书馆
20. 吴宗济、赵金铭、朱竹、刘骥 1992. 《现代汉语语音概要》：162-164，北京：华语教学出版社
21. 王力 1980. 《汉语史稿》，北京：中华书局
22. 王洪君 1994. 《汉语非线性音系学》：237-243，北京：北京大学出版社
23. 魏钢强 2005. 北京话的轻声和轻音及普通话汉语拼音的注音，《中国语文 2005（6）》，北京：中国语文出版社
24. 朱川 1997. 《外国学生汉语语音学习对策》：179-242，北京：语文出版社
25. 朱晓农 2013. 《语音学》：272-297，北京：商务印书馆
26. 张树铮 2003. 蒲松龄“聊斋俚曲集”所反映的轻声及其他声调现象，《中国语文 2003（3）》，中国语文出版社
27. 郑秀芝 1996. 谈谈对外汉语课的轻声教学问题，《外语与外语教学 1996（1）》，大连：大连外国语学院
28. 今津藤一 1993. 『日本語と外国語の高低アクセントの構造』：9-13，近代文藝社

〈付記〉本文は、科学研究費助成金若手研究（18K12451）（初修中国語音声教育への授業コンテンツ開発サイト導入による教員指導力の向上の研究）による研究成果の一部である。